

因陀羅網 Indra's net ~ 今、ここでコミューンを生きる

再び「クロンビ～風が吹く」 日本「自主上映会」の動きに当たって

田恩伊 (チョン ウニ)

「クロンビで踊っていた彼女、全部治ったよ！」

「クロンビ～風が吹く」のチョ監督がこう言った。『彼女』の乳がんが全部治ったという意味だ。今日はこの会話を至った経緯を話そう。

前回の連載原稿に「JEJU 平和祭」のことを話し、「クロンビ～風が吹く」という映画について少し紹介したが、平和祭の開幕日である10月16日に「クロンビ～風が吹く」を会場で上映することになったという便りが開催の少し前に届いた。エコトピアを掲げた「山水人」祭りの開催期間中「JEJU 平和祭」のプレイベントを行うらしいという話は聞いていたが、その時点では「クロンビ～風が吹く」と「JEJU 平和祭」を結びつけられる情報が何もなかったため、私はこの便りが少し予想外の展開だと思っていた。後から聞いた話によると、日韓が共同で開催する初めての「JEJU 平和祭」だったため主催側もばたばたしていたらしく、ひょっとしたら「クロンビ～風が吹く」(以下、「クロンビ」と略す)も、そうした流れの中で「ばたばた」と風に当たっていたのだろうと推測している。

何年か続けてきたこの連載を読んできた読者なら(読者がいるなら^^)すでに分かっていると思うが、今まで取り組んできた私の一貫するテーマは共同体である。この「共同体」という言葉は、この頃少し表現の仕方を変えたりはしているものの、最近では専門領域ばかりではなく、地域社会や都市、家族、社会・福祉などをめぐる制度・政策側や活動グループ、団体、そして個人に至るまで、幅広く取り組んでいる重要な課題となって来ている。私の関心は、この頃こうした現象を生んでいる「共同体」というテーマを、現在

の視点ばかりではなく、歴史的な流れの中で具体的にとらえて考えてみたいということでもある。少し抽象的な表現を使うと、私たちの周りに起こっているすべての出来事に「過去」という時間帯を超えて存在する「現象」というものはないと考えているからである。私的であろうが、社会的であろうが、私が「歴史」というものを大切にする理由は、こうした理由からである。

つまり、日本の共同体を考える際に、私が1960年代から1970年代における日本の社会運動、特に当時のコミューンやカウンターカルチャー系で運動若しくは活動していた人々に関心を持っている理由は、今日の彼らの生き方にこうした「歴史の継承性」が見られる、ということに着目したからである。「より良い社会づくり」という考え方に基づいて考えるなら、この時期の大学紛争や安保闘争などを通して政治・思想的な変革期を経験した世代もまた、共同体という問いに深くかかわってくることは言うまでもない。

それがどういう形で沸騰したのであれ、「より良い社会づくり」を考えていた「先輩」たちの考え方やいろんな働きには、共同体の本質を問う重要なキーワードが幾つも潜んでいる。当然、そうした「先輩」たちのライフ・ヒストリーを追ったり、活動と一緒に参加したりしていると、自然と自分も「歴史」の一部であることに気がつくものだ。私が今回の「JEJU 平和祭」で期待していたのは、こうした「歴史的継承性」を確認することであった。なぜならば、今の日本の社会では中々見ることが出来ない、1960年代、1970年代の「先輩」たちがその平和祭に多く参加するという話を聞いていたからである。「先輩」たちが「今」という世代と「より良い社会づくり」という、ある種の普遍的な志向点でどういう接点を見つけ出し、動いているのかその具体的



な現場を確認したいという気持ちが沸騰していたのである。これについては、別の機会に詳しく書いてみたい。

こうした思いで、私は自分なりの幾つかの目的を立てて、予想半分期待半分を寄せながら10月16日の夕方、ソウルから済州島へ向かった。飛行機が予定より大分遅れて出発したため、済州空港に着いた時にはすでに暗くなっていた。宿泊先に荷物を下ろして急いで平和祭の会場に向かう。受付の入り口には、日本と韓国の若者たちがはつらつと対応していた。しかし、会場の向こう側から見えてくる人々の様子や服装を見た瞬間私は思った！「これって、山水人？？？済州？？？」。

いくら韓国南部のクニ済州島でも、さすがに10月の中山間地域の夜は寒い。昼の穏やかな日差しとは違って夜になると冷え込みが激しいらしい。映画は始まったばかりなのに、ぶるぶると震えてくる体を両手で力一杯

抱えるだけで体が力ちかちと堅くなった。しかし、大型野外スクリーンと立派な音響設備を通して私たちに語りかけてくる「クロンビ」は感動的だった。世界文化遺産であり、美しい自然保護地域を基地建設から必死に守ろうとする住民たちの戦いは、済州島の自然と人々を交差・投影しながら力強く美しい「生命」として痛ましく伝わった。私は感動に震え、寒さに震え、気が遠くなりそうだった。「モモの家」のSさんが持つて来てくれた掛け物や彼女の暖かい体温が隣にいなかったなら、私は一体どうなつていただろう。監督との対話を含め映画は10時過ぎまで続いていたが、その場で即時に、日本で自主上映をしたいという声が上がって来た。久しぶりに会った監督と話をしていて私に、その「声」が「クロンビ」の風にあたって私に飛び込んできたことは言うまでもない。

前回の連載にも少し触れていたが、監督とは仕事関係の取材ではじめて知りあったので、厳密に言うと元々彼は私の取材源であった。1990年代は、韓国に大きな危機が訪れる不吉な予感に満ちていた時代でもあったが(1997年にIMF経済危機勃発)、一方、社会的には「より良い社会づくり」に対する人々の意識や働きが増幅していた時期もある。「共同体・共同体運動」という言葉が社会的に新しい意味づけや形を求めながら広がっていったのもこの時期であった。こうした時代に、危険な挑発だったにもかかわらず、韓国社会でタブー視されていた済州島の「4.3事件」を描いた映画「レッドハント」を世に向けて出したのが、このチョ・ソンボン監督だった。彼が1996年に発表した「レッドハント」という映画は、韓国社会に大きな波風を立てる結果となった。メディアの仕事をしていた当時の私にとって、彼は当然興味津々の貴重な取材源だったのである。

また、2010年に私は「日韓カトリック青年、出会いと連帯への旅」という青年交流会を企画したが、この集いは自然豊かな空間を借りて4日間生活を共にしながら行われた。プログラムは、まずは済州の歴史、文化、社会、人々を理解しようという趣旨から、現場中心の企画で構成されていたため、カンジョン村や「4.3事件」の跡、太平洋戦争の時に日本軍がつくった多くの軍事施設、例えば、飛行場や格納庫、地下バンカー、地下洞窟陣地などを探訪したりしていた。この時に「4.3事件」の遺跡に案内して、日韓の青年たちに韓国、済州島の痛ましい近現代史を熱く説明し語ってくれたゲストも「クロンビ」映画のチ

ヨ監督だった。済州で起こった近現代史について文献ではなく、体と足で語れる数少ない一人だったからである。

「4.3事件」については、今は日本でも少し検索してみれば、いろんな活動団体や専門家たちによる詳しい内容が紹介されているので、ここで詳しい内容は言及しない。非常に簡単に要約すると、日本が太平洋戦争の時には戦略的軍事基地として利用し6万に上る日本軍を駐屯させ、日本軍が撤収した後からはアメリカの軍政の下におかれ大混乱に陥っていた済州島で、ある日発砲事件が起きる。そして、それが引き金になって多くの民間人が犠牲にされる事件がかなり長い期間続くことになったが、これがいわゆる済州の「4.3事件」である。韓国社会では政治的な問題として色眼鏡がかけられ、長年タブー視されてきたが、1990年代から真相究明のための動きが少しずつ本格化はじめ、1996年の「レッドハント」映画の上映事件、1997年ベルリン映画祭招請の後起こった上映主催者と監督の拘束令状執行事件、世論の高まる関心など、によって、2000年にはやっと「済州4.3事件真相究明及び犠牲者名誉回復のための特別法」が制定されることになっ

た。この法律制定によって正式に申告された犠牲者の数は14,000人程度だが、未確認や未申告などの数を含むとおよそ3万人あまりの人が死んだと言われている。これは、現在への連續性を持たない、あるいはそれ以前の過去とは何も関係のない、単なる「地域的で」「過去の」ことに過ぎないことだろうか。

平和は旅、平和は風、平和は涙……これは、「クロンビ～風が吹く」の映画に出てくる歌の歌詞である。誰もが力の押しつけで強いられることのない世界、平和な世界を望む。しかし、涙と動搖のない状態が平和な世界ではないはずだ。カンジョン村の「クロンビ」は消えてしまったが、その魂の風が再び吹いている。一枚の大きな岩だった「クロンビ」は、今は多くの「クロンビ」になって風に吹かれ、済州を越え日本にまで届いている。「再び、クロンビ～風が吹く」

あ、忘れていた！クロンビの一枚岩の上で踊っていた「彼女」の病気が綺麗に治ったと言った監督は、私にこうつぶやいた。

「あなたにクロンビの魂が移ったから、あなたも治るよ！」と。

クロンビ上映実行委員会がスタート



平和祭で映画を見た人、カンジョン村に行った人達が中心になって日本でも上映しようと動き始めています。今のところ来年3月に監督に来てもらい、各地を上映してまわるツアーを考えており、沖縄、熊本、神戸、大阪、京都、山梨、神奈川、東京など15カ所以上でやれそうだと思っています。

監督に来日してもらうのでそれなりの予算をたてる必要があり、まだ具体的なことは決まっていませんが、これからお金のことや宣伝のこと上映のやり方など詳細を詰めていく予定です。

そのためFaceBookでグループをつくり情報をシェアしたりウェブサイトも準備中(一部公開しています)です。FBをしていて興味ある方はグループにご参加ください。

事務局には大阪・モモの家の志保さんが手をあげてくれ、僕はFBやウェブサイトを担当、田さんは監督との調整連絡役になってくれます。

- 事務局(問合せ先): sihomura@occn.zaqq.ne.jp 080-1522-9817
- ウェブサイト <http://amanakuni.net/gureombi/>
- FaceBook <https://www.facebook.com/groups/gureombi2015/>